

購入1年後の衣服の着用実態と着用・非着用を規定する要因について

○加來卯子\* 樋泉俣子\*\* 中川早苗\*<sup>3</sup>

(\*西南女学院短大, \*\*光華女子短大(非), \*<sup>3</sup>奈良女大生活環境)

【目的】一般に人は衣服購入時に色・柄、デザインなどの外観、肌触りの良さや取り扱い易さ、手持ちの衣服とのコーディネート、社会への適応性など様々な要因を評価、検討していることが過去の研究より明らかにされている。しかし、購入した衣服の中には着用可能であるにもかかわらず、シーズン毎に移り変わる流行や好みの変化などにより着用していない衣服も多くあるのではないかと推測される。本研究では購入後1年ほど経過した衣服を対象に、着用の実態を把握するとともに、着用・非着用を規定する要因について検討した。

【方法】九州および関西の短期大学に在籍する女子学生を対象に、1998年12月、配票留置法による質問紙調査を行った。配布数473票、有効回答数450票、回収率95.1%であった。主な調査項目は1年前に購入した衣服で現在着用していない衣服数およびそのイメージ、1年前に購入した衣服で現在も着用している衣服のイメージ、流行に対する意識、ここ1、2年の好みの変化、自己概念などである。

【結果】1年前に購入した衣服の中で着用していない衣服を持つ者は全体の94.8%、ここ1、2年で好みが変わったと答えた者は88.4%を占めていた。衣服の好みの変化と着用していない衣服数との関連では衣服の好みが変わったと答えた者に着用していない衣服数は多かった。現在着用している衣服と着用していない衣服のイメージでは、子供っぽい-大人っぽい、古い-新しいなどの項目で差異が見られた。また、着用していない衣服を多く持つ者に着用している衣服、着用していない衣服のイメージに差が認められた。